

聖書：創世記 25：1～11

説教題：幸せな晩年を過ごし

日時：2023年12月3日（朝拝）

創世記 11 章の終わりの部分から記されて来たアブラハムの生涯の最後の様子が今日の箇所にも書かれてあります。彼は信仰によって歩いて来ました。「信仰の父」と呼ばれる人としての歩みをして来ました。その彼の最期はどうだったのか。何か良いものを受け取ったのか。その人生は良かったのか。報いは何かあったのか。そのことを私たちは今日の箇所に見ることができます。

まず書かれているのはケトラとの間に生まれた子孫についてです。このケトラとは誰でしょうか。突然その名前が出て来て私たちは驚いてしまいます。そして気になるのは、いつアブラハムはケトラと結婚したのかということです。サラが死んだ後なのか、それとも前なのか。もし後であるなら私たちはこの箇所をまだ受け入れやすいと思います。アブラハムは妻を失って寂しく、生活上の困難も覚えていたかもしれません。そこで新しい妻を迎えたのだと。しかし問題は彼女との間に子どもが 6 人も生まれたことです。サラは 127 歳で死んだと 23 章 1 節にありましたから、約 10 歳上のアブラハムはその時 137 歳でした。それから彼が死ぬ 175 歳までの間に果たして 6 人も子どもが生まれるものでしょうか。彼は突然活力を回復したのでしょうか。アブラハムはイサクを生んだ 100 歳の時でさえ、ローマ人への手紙 4 章 19 節によれば、そのからだは死んだも同然であったと言われていました。そういう意味でイサクは奇跡的に神から授かった子です。なのにそれから 37 年以上経ってから 6 人も子を持つことができたなら、イサクが特別な奇跡の子ということにはならなくなるのでは？という疑問が出て来ます。そこで多くの学者はケトラがアブラハムの妻となったのはサラの存命中だったと見ます。歴代誌第一 1 章 32 節ではケトラがアブラハムの側女と言われていています。これはサラが正妻であったことを暗示しています。今日の箇所にも 6 節に「側女たち」という言葉があり、その中にはその前で述べられたケトラも含まれていると考えるのが自然であると思います。ではアブラハムはいつケトラを妻あるいは側女としたのでしょうか。おそらくハガルによってイシュマエルを得るよりも前ではなかったと思われます。イシュマエルはアブラハムにとって最初の子だったと思われるからです。ではイサクの誕生より前だったのか、後だったのか。色々意見はありますが確定的なことは聖書から知ることはできないようです。

しかし今日の箇所を読むにあたって、このことがアブラハムの罪として責められてはいないことに注目しておく必要があると思います。もしこれが一夫多妻であった場合、それはもちろん本来の神の御心に沿ったものではありません。神はアダムに一人の人エバを連れて来ました。複数の妻を連れて来ることはしませんでした。創世記2章の最初の結婚には一夫一婦制が主の御心であることが示されています。しかし罪の世界となって一夫多妻が起こるようになりました。特に裕福な家では跡取りの問題があり、このようなことが良く見られたようです。そういう歴史の中で神は導かれました。そしてアブラハムの生涯をまとめるにあたり、ここにその記録が載せられています。

彼にはケトラを通して6人の子が生まれ、さらにそこから子孫が生まれました。これは17章4~6節で「あなたは多くの国民の父となる」と言われた神の約束の成就の一つとしての意味を持っていると思われます。しかし同時にここにはアブラハムがイサクを区別したことが記されています。5節に「アブラハムは自分の全財産をイサクに与えた」とあります。これは単なる人間的なえこひいきではありません。彼はイシユマエルを可愛がったようにケトラとの間に生まれた子も可愛く思ったでしょう。しかしイサクは区別したのです。これは信仰の行為だったと考えられます。神は21章12節で「イサクにあって、あなたの子孫が起こされる」、つまりイサクこそ神の契約を担う者であることを示されました。人間的に考えれば、イサクがもし早くに死んだ場合、財産はどうなるのか。そのための保険として、他の子どもたちにくら分か分与する方が良いと思われたかもしれません。しかしアブラハムは信仰に立って行動しました。側女たちの子には贈り物を与え、自分が生きている間に東の方へ行かせて、イサクから遠ざけました。その結果、彼らの多くはアラビア地方に住む者たちとなりました。約束の地カナンから見て東側の地域となります。約束の地カナンを受け継ぐのはイサクです。アブラハムは自分が生きている間にこのようにしたのです。これは彼の信仰の行為だったのです。

さて7節以降にアブラハムの死が記されます。彼の一生は175歳でした。アブラハムは「幸せな晩年を過ごし」と言われています。ここに今日の箇所の中心メッセージがあると思います。創世記において死は墮落によって生じたものでした。それは罪の呪いの現れです。好ましくないこと、残念なこと、悲しいことです。しかしその死が

近づくアブラハムの晩年は幸せだったと言われています。これも実はすでに 15 章 15 節で約束されていました。神はそこで「あなた自身は、平安のうちに先祖のもとに行く。あなたは幸せな晩年を過ごして葬られる」と言っておられました。さらに 8 節には「年老いて満ち足り」という言葉までついています。なぜ彼はこのような晩年を過ごすことができたのでしょうか。24 章 35 節にあったように、アブラハムは確かに富んでいました。しかしだから満ち足りていたわけではありません。金持ちは必ずしも幸せな晩年を過ごすとは限りません。セレブと言われている人たちは往々にして人生の晩年において色々な問題に巻き込まれ、財産を巡って様々な人間関係も壊れ、苦い経験をし、残念な状態に至るというニュースを聞くことがあります。しかしアブラハムの晩年は幸せでした。第 3 版までここは「アブラハムは平安な老年を迎え」と訳されていました。アブラハムは主を信じて歩んだ結果、自分の人生は間違っていたとか、失敗したと言って悲しみ、後悔していたのではなかったのです。むしろ主に従って歩んで来て本当に良かった！という満足と喜びがその心を支配していたのです。

彼は決して失敗をしなかった人ではありませんでした。創世記で見て来た通り、いくつもの失態をさらけ出しました。振り返れば恥じ入らざるを得ない行動も取ってしまいました。しかし彼は主の憐みによりすがり、恵みによって義と認められる祝福を知る者となりました。御前にある自分の罪が赦され、神に受け入れられている喜びを知る者となりました。イザヤ書 46 章 4 節：「あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたが白髪になっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。わたしは運ぶ。背負って救い出す。」まさにこのように神に担われて来た者であることを彼は感謝をもって振り返ることができました。その神が今日も私とともにいて導いてくださっている。これからもなお救い出してください。アブラハムはこの時、問題がなかったわけではありません。土地の約束はまだ全くと言っても良いほど成就していませんでした。持っていたのはサラを葬るために買った一片の墓地だけです。この世的に見れば寄留者であり、不安定な生活を送っている者です。しかしこの世がすべてではない。その先がまだある。神は私の神としてこれからも導き、死を越えてご自身の約束を必ず成就してください。そのことを信じて、アブラハムは晩年、この上なく幸せな状態にあったのです。主にあって満ち足りる状態にあったのです。

ここを読む私たちにとってのチャレンジは、果たして私はこのような晩年を過ごす者だろうか、また今過ごしている者だろうかということではないでしょうか。神の祝

福はやがて天に行った時にのみ受けるものではないこと、この世においても信仰の生涯の最後にこのような祝福にあずかることができることを私たちはここから学ぶのです。アブラハムが主にずっと従って来て、その最後に地上で受けたものがこれでした。神がそのように彼を導いてくださったのです。

そして死後のことが8節後半にあります。それは「自分の民に加えられた」ということです。これは次の9節で語られる葬りとは区別されています。彼が葬られる墓にはまだサラしか入っていません、ですから「自分の民に加えられた」とは、墓への葬りを指す表現ではありません。これは死後直ちにアブラハムの霊がすでに神のもとに召されて死後も存在し続けている人々の仲間に加えられたということです。イエス様が十字架上で犯罪人の一人に、「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」と言われた通り、死後直ちに信者の霊は引き上げられて、イエス様とともにパラダイスと呼ばれる祝福の内に入ります。しかしその人は単にキリストまた神と結ばれるだけではなく、自分の民と呼ばれる同じ信仰に生きた人々と結び合わされるということも起きるのです。ですから信仰を全うして先に天に召された方々は一人さみしく今を過ごしているではありません。その方々は主とともにあるばかりでなく、天にある神の民の交わりの中にあります。最終的な祝福はやがて復活が起こり、御国が完成する時に実現しますが、その前味となるような祝福にその方々は生かされています。そのことを思って私たちは慰めを受けますし、私たち自身も信仰の生涯を全うした暁には直ちにこの祝福に生かされる者となるのです。

最後9節以降にアブラハムの葬りが記されています。息子のイサクとイシュマエルがこのことを行いました。イサクの方が年齢は下ですが、神の約束を引き継ぐ者としてイシュマエルより先に記されています。ここから二人は互いに連絡が取れる状態にあったことが分かります。イシュマエルはすべての兄弟に敵対して住むと16章12節で言われていましたが、ここではイサクと一緒に葬りを行っています。彼らは父アブラハムをマムレに面するマクペラの洞穴に葬りました。これは23章で見たように、妻サラを葬るためにヒッタイト人から買い取った場所です。アブラハムは妻サラを生まれ故郷に葬ったのではなく、この約束の地を私たちは必ず神から受け取るのだという信仰の表明として、この一区画を買い取り、そこに妻を葬りました。そしてそこにアブラハム自身も葬られたのです。夫婦揃ってこの地で信仰の歩みをし、ともに神の約束が成就する日を待ち望む者たちとして、約束の地の中にある墓に葬られ、その信

仰を証ししたのです。

最後の 11 節に「アブラハムの死後、神は彼の子イサクを祝福された」とあります。こうして神の働きはアブラハムからイサクへと継承されました。アブラハムが去ることによって神の働きはストップとなったのではなく、約束の子イサクを通してその働きはなお前進して行きます。そのことが次回以降記されて行くこととなります。

以上、信仰によって歩んだアブラハムの地上における最後の様子を見ました。彼は幸せな晩年を過ごしました。これは神が彼に備えてくださった祝福でした。果たして私たちはどうでしょうか。アブラハムと同じ祝福に生きる者でしょうか。この幸せな晩年を過ごすための鍵となることは、神がくださる救いを自分のものとして受け取ること、特にまず罪の赦しの祝福を自分のものとして受け取ることでしょう。先に述べたようにアブラハムは決して完全な人ではありませんでした。何度となく罪を犯す人でした。そういう自分だけを見つめれば、その一生は残念なもの、傷だらけのもの、がっかりし、後悔するようなものでしかなかったでしょう。しかし彼はそんな自分の罪を赦し、恵みによって義と認めてくださる神を知りました。一体、聖なる聖い神がどのようにしてこの罪深い自分を赦し、受け入れることができるのでしょうか。神の約束に基づいてアブラハムがその中心に見ていたのはキリストだったとイエス様が言っています。ヨハネの福音書 8 章 56 節：「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見るようになることを、大いに喜んでいました。そして、それを見て、喜んだのです。」彼の平安と喜びの基礎はイエス様にあったのです。とするなら私たちは益々アブラハムが経験したこの祝福に生きることができるはずです。アブラハムがぼんやり彼方に見つめたものを、私たちはより具体的に知ることができる位置に置かれています。神はキリストをこのクリスマスの時に遣わし、その方において私たちの罪を贖うみわざを成し遂げてくださいました。ですから私たちはこのキリストを神がついに送ってくださった救い主として感謝して受け取り、このキリストにあって、その十字架を通して、自分の罪が赦される幸い、神の前に義と認められる幸いに生きる者でありたいと思います。どんなに大きな罪を犯したとしても、このキリストの十字架を通して赦されない罪はありません。この罪の赦しを神からの賜物としていただくこと。これこそ幸せな晩年を過ごすための第一の基礎となることです。

また過去に一度罪の赦しを受ければ、それで十分なのではありません。私たちは

日々新たに罪を犯す者たちです。その罪をそのまま放置していたら今日という日を神の前にきよい良心をもって平安に、また幸せに過ごすことはできません。ですから私たちは自分の罪に気づかされる度に、その罪をキリストのもとへと持って行き、赦しと聖めを新たにいただく者でなければなりません。そうして神の前に曇りのない良心をもって従う歩みにこそアブラハムが経験した幸せは用意されています。

またアブラハムはこれまでの信仰の生涯を通して、特に様々な試練を通して、主は備えてくださる神であることを堅く信じる者となりました。思わぬ出来事が生じて、主がすべての上にご計画を持ってくださり、その解決を先に備えてくださる。そのような信仰に立つ者とされていたので色々な出来事によって翻弄されることのない平安を彼は心に深くいただいていたのですし、その神が最終的にご自身が備えてくださった都、天の故郷へと導き入れてくださることを確信して、深い平安と喜びに日々生きる者とされていたのでしょう。

アブラハムは神を信じて従う信仰の生涯を通して、人生の晩年にこのような祝福を受けました。信仰によって歩む人生の結果は素晴らしいものであることを経験し、証ししてくれました。私たちもこのアブラハムと同じ道を行く者とされたいと思います。主を信じて主に従う歩みを続け、その実りとして、晩年においてこのような祝福を味わう者とさせられ、さらに私たちを背負い運んでくださる神が導き入れてくださる祝福を望み見て、喜びをもってその先へと進んで行く信仰の民の歩みでありたいと願います。